

名寄市立大学

授業改善通信

第3号 (2009年3月発行)

目次

1	大学教育における教育力・研究力の向上	1
2	学生授業評価アンケート実施報告	2
3	本学授業の紹介(今野道裕教授担当「児童文化演習」)	3
4	よりよい授業をめざして=第3回ピアレビュー報告=	5
5	授業改善の実践例の紹介	
	(1) ある職業専門養成学校における授業改善のねらい	6
	(2) ICT活用FD推進セミナー参加報告	7
	編集後記	8



1. 大学教育における教育力・研究力の向上

平成21年2月号の中央公論に『大学の絶望』という特集が組まれていました。その中で札幌大学の鷺田小彌太教授が「大学教授に冬来たる、か?」というタイトルで寄稿されていました。鷺田教授は大学教員の質的低下を辛辣に他書でも書かれている方です。彼はこの中で大学教員の授業について触れ、大学における高等教育のためには『研究力』が欠かせないと述べています。研究を行うことで、トピックを詳細に理解することができ、それを講義に反映していくことで学生が興味を持って聞ける講義となるというわけです。トピックに触れず、教科書を読みただけの講義は陳腐であり、学生に興味をわかない内容という考えです。大学教員にとって、研究力も、教育力も重要であることは間違いありません。研究力はあるが、教育力がない場合、講義を工夫することで学生に興味を持たせられる可能性は大きく、その逆は成り立たないとまで述べています。

上記の考え方は重要な一面であることは間違いありません。教員が学生に向かって、学問を教授するわけですから、教員が専門性を常に磨いていく必要はあります。専門性を磨くプロセスは研究を行うことによってなされるので、研究力は必要でしょう。しかし、文部科学省 (www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/06101201/002.pdf) に示されているように授業評価の性質は単純なものではないことがわかります。

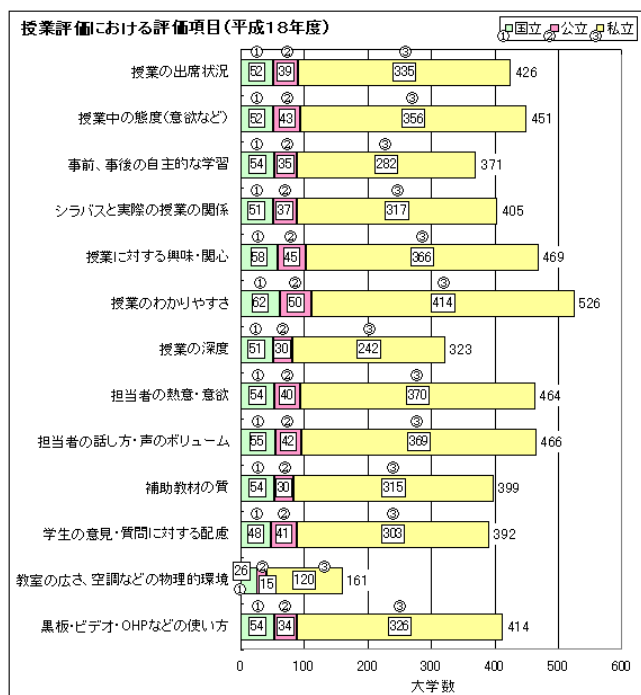
<授業評価の性質>

- 1) 学生の成績、在学年数、学問的能力と授業評価の結果は無関係
- 2) 受講者数30名以下で評価が高くなる
- 3) 担当科目・年度が変わっても評価は安定
- 4) 文系教員よりも物理科学系教員が低く評価される
- 5) 研究と教育は表裏一体。車の両輪は嘘、研究能力(論文数)と授業評価は無関係
- 6) 年齢とともに評価が低くなる

このことから、単純に教育力に研究力が必要とは言えなさそうです。もちろん、卒業研究を担当される場合に

は研究力が欠かせないのは事実だと思います。また、科目によっては研究力を活かさなければ、学生に興味を持たせられないものもあると思います。したがって、ありきたりではありますが、科目に応じて、(場合によっては研究力を活かしながら) 授業の展開に工夫を持たせる以外ないといえます。もちろん、これらの工夫に大学組織として支援する体制づくりが重要であることもここに添えておきます。

文部科学省のホームページによれば、平成18年度で国立62大学(約71%)、公立52大学(約68%)、私立427大学(約75%)、国公私立全体で541大学(約74%)において、全学的な学生による授業評価を実施しています。これ数値は昨年度に比べ3%程度増加しており、授業評価の実施は当たり前の時代になってきていることを示しています。同ホームページ掲載の「授業評価における評価項目」は、教員が授業するにあたって、さしあたり何を改善すればよいのかについての目安となります。以下に重要などころのみ同ホームページより転載しました。



評価項目のベスト3は次のとおり。

- 1位: 「授業のわかりやすさ」
- 2位: 「授業に対する興味・関心」
- 3位: 「教員の話し方・声の大きさ」

これらからみると研究力が活かせるのは「授業に対する興味・関心」といえそうです。しかし、他の項目は研究力でカバーできるものではありません。したがって、教育力を向上させるため、短期的には「話し方」や「教具の使い方」を工夫し、長期的には、教員の研究力の向上をはかり「授業に対する興味・関心」をさらに掘り起こすという考えが成り立ちそうです。先ほどの授業評価の性質に示したように教員の年齢とともに評価が低くなるわけですが、それはすべての項目について低くなるようです。中でも、話し方、板書・スライドの提示法、授業への学生参加についての評価の低さが顕著です。年齢とともに講義の経験年数も増えるわけですが、評価は下がるわけですが、年数を経るに

つれ教員の声質は変わり、教具は多様化します。しかし、学生はほぼ均一に高校を卒業して間もないわけですから、このギャップを埋める方法が授業改善につながるのではないかと考えています。特に話し方を変えるだけで、受講者の興味の持ち方は変わると思いますので、試してみる価値はあると思います。

2. 学生授業評価アンケート実施報告

2008年7月(前期)および2009年2月(後期)の計2回、授業評価アンケートを実施しました。名寄市立大学の1~3年次開講科目、名寄市立大学短期大学部の1~2年次開講科目、計362科目(前期171、後期191)が実施対象です。ただし、臨地実習や実験等、授業評価が難しい科目については担当教員の判断に委ねています。また、今年度の実施から、アンケート用紙の準備、回答結果の集計などの作業について、外部委託で行うことになりました。これにより、迅速性、正確性、匿名性が向上したと言えます。さらに、今年度実施分より、アンケート項目について以下の変更がありました。

- ① 記名式自由記述欄を変更する

(変更前) 授業全体の感想や意見などを以下の欄に自由に書いてください。

氏名

学科

(変更後) 授業の内容や方法の改善に向けて、あなたの感想や意見を自由に書いてください。(もし差し支えがなければ氏名を付記してください。)

② 「あなたは、この授業に積極的に取り組んだ。」という質問を削除する

その結果、前期アンケートの回収率は90.8%となり、多くの受講者から貴重な意見を集めることができました。積極的な回答に感謝いたします。授業評価の結果および自由記述に対する各担当教員からのコメントにつきましては、本学FD委員会が発行する「学生授業評価報告書」をご覧ください。今後も授業評価アンケートを継続的に実施しますので、回答にご協力ください。

3. 本学授業の紹介

第3回目の授業紹介は、短期大学部児童学科教授の今野道裕先生ご担当の「児童文化演習」です。以下は今野道裕先生による執筆内容です。

「児童文化演習」は児童学科1年を対象とした通年の授業である。私(今野)が前期を受け持ち、後期は本学特任教授である絵本作家あべ弘士さんが集中講義の形で行っている。後期のあべ先生の集中講義は、動物園に行き実際の動物を観察したり、飼育員だったあべ先生ならではの話を聞いたり、あべ先生から動物の絵を描くポイントを指導してもらったりという、大変魅力的な内容であるが、今回は私の授業の内容について紹介させて頂く。私の受け持つ授業は、保育士や幼稚園教諭になった時に役立つような実践性を求められる内容のものが多い。似たような演習が多いが、私の中では、個別的な活動を「図工Ⅰ」で、「児童文化演習」では集団的な課題を、「表現Ⅲ」ではより応用的な内容にすることで授業内容の差別化を図っているつもりである。しかし、それでも「児童文化」や「図工」「造形」の全てを網羅し、教えることは出来るはずもない。学生には、個別の技法・技術を体得するとともに、どう教えるか、どのような視点が教える際に大切なのか、良い教材の見つけ方等といったことも、授業の中から見つけ出し、考えてもらいたいと願っている。前期の授業は、主に①「人形劇」を作る ②「影絵劇」を作る という二つの内容からなっている。

前半の①「人形劇を作る」では、

- 1)10cm 立方のスポンジの固まりから人形の頭を削り出す。
- 2)軍手を利用した人形の体部分を作る。
- 3)顔のパーツ・小道具などをつけ、人形として完成させる。
- 4)脚本を書き、必要な道具を準備する。
- 5)練習後、全員の前で公演する。

という流れで行う。学生にとって、スポンジから人形を作ることも、人形劇をすることもたぶん全く初めての経験であろう。また高校の時に「美術」を選択していない学生も多く、授業アンケートにも「図工は苦手」「中学校以来です」などの文字が並び、最初の段階では、全く新しい内容の授業に戸惑いながら受けている学生も多い。

1)～3)の人形作りの段階では、個人の作業である。学生は、自分の作ってみたい人形をデザインすればよい。それが動物であろうと野菜であろうとTVのキャラクターであろうと構わない。それは、できあがる人形をやがて経験する実習や就職後も活用してもらいたいからである。グループを先に決め、物語を決定してしまうと、主役・脇役などの区別が必要になり、自分の意に沿わない人形を作らなければならない場合も生じるであ



ろう。例えば昔話『かにむかし』で言うと、話の上で必要と言われても「はぜ棒」や「ウシの糞」の役に当たってしまえば、その後の人形活用に意欲的にはならないであろう。まずは、自分の好きな人形を作る、そのことが今後の意欲付けにも重要と考え、授業を組んでいる。

そうすると、グループを作っても集まる人形たちに一貫性はなく、脚本は必然的に「昔話」のパロディや「遊び」のエチュードが多くなる。それでも、多くの場合、学生たちは「バラバラだった友だちがやがて仲良くなる」といった脚本を仕上げてくる。まさに自分たちのことを反映しているかのようである。

そのことからわかるように、この授業のもう一つの目的は、「交流」である。多くの学生は「保育士」や「幼稚園教諭」になることを目指し、本学にやってくる。「人と接し・人を育てる」仕事に就こうとしている。そのためにはコミュニケーション力は重要である。しかし、それをただ学生の努力にのみ求めても時間が懸かるし、不得手だという学生も増えてきているように思う。そんな時、「もの」や「もの作りの作業」は、あまり接していない同士が親しくなるのに有効だと考えている。



まずグループ作りであるが、「人形劇作り」では学籍番号末尾で学生を分け、5人程度ずつ10グループ作る。入学当初の学生にとっては、ランダムに分けられたにほぼ等しいはずだ。グループに親しい人は全くいない状態かも知れない。しかし、夢中になって「もの作り」の作業をして、ふと気がつくとならでも同じ作業をしている「仲間」がいる。そのことが結果として早く親しむ一つの方法ではないか、そう思っている。

二つめの内容である②「影絵劇づくり」では、グループ作りの手法を変えている。最初に劇にしたい題材を決め、その作品に参加したい者を募る形を取っている。より良い作品を作り上げようとするならば、自分がその作品づくりに参加してみたいという意欲を重視するのが良い。影絵づくりでは、「日本の昔話を美しく表現しよう」という内容的な課題も付加している。さらに一般公演やオープンキャンパスでの公演を行い外部の観客を呼ぶことで、学生が時に陥りがちな「自分たちのみの楽しさ」からの脱却を計っている。

また、この授業の授業外の課題として「伝承遊びの検定」を付加している。「けん玉」や「あやとり」、「こま」、「竹返し」、「お手玉」のどれかを習得することが合格の条件である。どの種目もそれぞれ10課題ほどあり、私の研究室で技を見せ「合格」する必要がある。つまり、検定を受けることが担当教員である私との「交流」にもなっている。しかし、「遊び」の検定である以上、堅苦しく行うのではなく「遊び」としてチャレンジできるよう雰囲気作りをしているつもりである。このような「伝承遊び」は、子ども（学生）同士が教えあうのが一番うまく伝わる。学生同士が教えあうことも、もちろんこの課題のねらいである。私の研究室はこの時期、学生であふれかえる。

「楽しい」は保育や「児童文化」・「遊び」にとって重要なキーワードであるが、学生の「学ぶ意欲」にとっても、同じくらい重要になってきているのではないだろうか。



4. よりよい授業をめざして =第3回ピアレビュー報告=

2009年1月16日(金)、名寄市立大学本館看護学科棟実習室において、授業改善委員会主催による、「第3回(2008年度)授業ピアレビュー(ピアレビュー)」を開催いたしました。本企画の主旨は、「教員同士が相互に授業を公開し、授業法の改善を目指して話し合う中で、教員の授業能力を高めていく」ことにあります。以下、ピアレビューの概要をお伝えします。

本年度のピアレビューは昨年同様、授業参観と参観した授業を基に授業方法のディスカッションを行うという2部構成で実施した。1部の授業参観には15名、2部のディスカッションには11名の教員が参加された。

本年度は昨年度までの講義法に加え、演習を取り入れた授業を参観した。参観した授業は、看護学科の澁谷恵子教授が開講している「ヘルスアセスメント」であった。ヘルスアセスメントは、看護学科1年を対象として後期に開講されている。今回の講義主題は、「腹部・消化機能のアセスメント」であった。澁谷教授は学生にも授業準備をさせる目的で、授業前日までに授業に関連するテキストのページや必要物品の掲示を必ず行っているとのことであった。



そして授業当日は、最初にパワーポイントと学生配布資料を活用して、前回の授業のポイントと本日の目標を確認した上で、腹部・消化機能のアセスメントに必要な知識習得のための学習が行われた。

ヘルスアセスメントを行う際、身体部位やその名称を理解することは、大変重要である。澁谷教授はその都度、学生自身の身体部位を実際に触るように促し、学生が正確な部位を触ることができるようになったことを確認しながら授業を進めていた。その後、説明した内容のDVDを視聴させ、重要な箇所は澁谷教授が自ら説明するなど、DVDの解説を強調する手段をとっていた。DVDを視聴させる理由は、学生がヘルスアセスメント技術を、より具体的にイメージできることをねらったことであった。また澁谷教授は、DVD視聴中に、「もう少しだよ！」などと声をかけることで、学生の集中力を保たせる工夫も行っていた。DVD視聴後は、教授とインストラクターによるデモンストレーションを行なった。これは実際の患者とのやり取りのように、シミュレーション法を活用していた。学生は小グループに分かれてアセスメントを実践し、学習したことの確認を行っていた。最後に学生を集めて、本日の授業のまとめをして終了した。全体を通して澁谷教授は、視聴覚教材を効果的に活用し、テンポよく授業をおこなっていた。

2部は、澁谷教授から「本学で技術教育を行う課題」として、教員不足や学生も教員も準備に時間を要すること、履修学年が低下したことで、展開法を工夫していることが報告された。また、既習技術を繰り返し授業に取り入れて反復するように努めていることも説明された。参加者からは、教員が真剣にデモンストレーションする場面を学生が目当たりすることで、学生自身も課題に対して真剣に取り組めたのではないかという意見や、学生が退屈そうであったら違う話しをするなどの工夫が効果的であることが話し合われた。

また、授業中の発問について澁谷教授は、解答を求めるが指名は行っていなかった。他の教員は発問自体を行わないという意見もあった。このように発問の実施は、教員それぞれで、授業目的に合わせて意図的に使い分けが行われていることが確認された。

さらに興味深かったこととして、学生は看護学概論や人体機能学などが既習であるが、それぞれを単独に考え

ることが多く、既習科目同士の関連のさせ方がわからないのではないかと言う点であった。このような場合、澁谷教授はそれぞれの授業の知識を想起させる形で、看護領域との関連性を持たせるように説明を行うとのことであった。このほか、次回の学習目標を提示することは、学生に好評であること、学習効果が高いなどの理由から他の教員も活用していることが報告された。これは、予習の方向性を示すことになり、学生たちの自己学習を助ける方法として有効であろう。



以上、ディスカッションで話し合われた澁谷教授の授業における様々な工夫は、他領域においても活用できる方法であることが確認された。全体的に授業法に関する建設的な意見交換が多くなされたことから、今回のピアレビューは、本企画の主旨に沿った会となったものと考えられる。

5. 授業改善の実践例

(1) ある職業専門家養成学校における授業改善のねらい

近年、大学においてはTAを担う大学院生による授業促進は、一般的なキャンパス風景となっている。国立大学ではどの大学でも実施されているが、多くの私立大学でもごく日常的に実施されている。たとえば、関西大学の場合、TAの選定基準については「各学部や授業科目の特色を活かしたTA活用方法であること」「TAの活用方法と授業改善との間に何らかの関連性があること」の2点を定めている。これらは、授業改善は大学教員のみならず、大学を構成する人的資源を活かし、大学全体で授業改善を図るという姿勢が必要だということを示唆している。

ここでは職業専門家養成と関連して、神奈川県立高等職業技術校である産業技術短期大学校産業デザイン科の授業改善の取り組みを紹介したい。

当学校作成の『授業評価・改善の手引きーより高い仕事力を持った人材の育成をめざして』という資料は内容が濃い。授業改善に取り組む目的は「社会情勢の変化により、一層質の高い仕事力を持った人材の育成」にあると明記し、「訓練の質のさらなる向上を図り、技術校生がより積極的、主体的に授業に取り組む姿勢を涵養するため、授業評価・改善制度に取り組んだ」と説明している。資料によれば、平成16年10月に4校4訓練コースで開始した授業評価試行実施は、17年度に全10校全35訓練コースに拡大実施され、都道府県立の職業能力開発校としては全国初の取り組みであることから、国や他県の関心も高い」という。ここで注目したいのは、本取り組みにおける3つの強調点にある。

第一に、「授業評価・改善は、一人ひとりの職業訓練指導員に負わされるものではなく、校として組織として取り組むものである。組織には個人の力の総和よりも大きな力があり、訓練の質の向上には、指導員個人ではなく、技術校全体で取り組むものである」という。この指摘は冒頭に示した大学におけるTAの活用に深く関連している。

第二に、「授業改善は授業という枠の中で自己完結するものではなく、技術校生の声に耳を傾け、その就職先企業の声に耳を傾け、そして技術校生のみならず、でき得ることならば企業とも一緒に取り組みたい」という開かれた姿勢である。資料には「就職先企業には、訓練内容や授業運営等については是非ご意見をいただきたい」との記載がある。つまり就職先機関の意見も授業改善に反映したいという点である。大学は常に社会の中に在るということを忘れてはならない。

第三に、「授業評価の目的はあくまでも訓練の質の向上であって、授業評価自体が目的ではないという点」である。「したがって、訓練の質を向上させる取組みの進行具合によって、授業評価の実施方法も変わることが考えられる。いや、むしろ、変わっていかねばならない」と指摘している。

以上の3点は、社会に通用するすぐれた職業技能者を養成したいという思いの現われと考えられる。そのためには活用できる資源はすべて使う。当該資料は「学生と教員が協力して授業を作りあげる」「授業評価の中で提案を促すことなどを通して技術校生が主体的に授業に関わるとともに、それがヒューマンスキルの研鑽になることが同時に期待できる」としている。

教員は学生の授業評価をとおして自分では気づいていなかった学生の受けとめ方に気づく。これが授業改善の第一歩だという指摘はあたりまえのように聴こえるが、実は最もむずかしい内容を含んでいる。「気づく」には「気づきたくない」という個人的抵抗や、「気づかない」という感受性の弱さに関する個人的資質の問題やらが関連している。学生の側では「アンケートに取り掛かる時間がないから、全部3につけちゃえ」と考え記載する人がいる、「まあ、ひとりくらい変なコメントする者もいて普通だよな」と考え、結果を授業改善に結び付けようとするのに消極的な教員がいるかもしれないとか、現場の声は実に多様であろう。授業改善につながる道は、教員がこれらを乗り越えていく道でもある。カリキュラムの改訂、講義内容の修正、教授方法の改善といった授業改善に関わる内容は、昨今、実に丁寧なアプローチが行われるようになってきているが、それらを推進する主体者の心の動きを常に意識しながら実施しなければ、授業評価の結果は形骸化したものになってしまう。授業改善を行う者が授業改善の対象者となっているという関係、学生が学生自身を、教員が教員自身を授業改善する。つまり主体者が被主体者となっているということを深く受けとめることが必要であろう。なおこの資料はPDFで公開され、次のアドレスで見ることができる。(pref.kanagawa.jp/osirase/.../sangyojinzai/development/guidebook.pdf)

(2) ICT活用FD推進セミナー参加報告

2008年10月7日に独立行政法人メディア教育開発センター(NIME)が主催する「ICT活用FD推進セミナー」に参加しました。このセミナーは、コンピュータやインターネットなどの情報コミュニケーション技術を活用して、FDをどのように展開しているのかを、国内外の大学の実践事例をもとに紹介したものです。その中で特に興味を持ったものは、中島平先生(東北大学)の「クリッカーが果たせる授業改善への役割」という講義です。

クリッカーとは、数字が割り当てられたボタンで構成される赤外線(あるいは無線)の小型リモコンです。一般的にはレスポンスアナライザと呼ばれており、その一種です。教員は講義時にクリッカーを1台ずつ受講者に貸し出し、それを持たせた状態で講義を行います。講義中に例えば3択の質問をしたとします。そのとき、受講者は答だと思つたものを1つ選び、それに対応するクリッカーのボタンを押します。受講者の回答は、クリッカーの受信機が接続されたノートパソコンに集約され、その結果を瞬時にパソコンの画面に表示します。その際、難解なコンピュータ操作は必要ありません。集計できるデータとしては、回答の人数分布や、誰がどのボタンを選択したかなどが挙げられます。

授業改善を意識した使い方としては、例えば、1番を「理解した」、2番を「わかない」と定義して、授業中にクリッカーを適宜操作させて、受講者の反応をこまめに確認するという方法があります。これによって、どこが受講者に受け入れられ、どこか不十分なのかをリアルタイムに把握することができ、必要に応じて補足説明を加えるといった対応もしやすくなります。この短い周期でのフィードバックが、授業改善そのものであると言えるかと思えます。

授業改善委員会では、2009年度予算として、クリッカーの購入を請求しました。クリッカー50台セットと、受信のための機器および集計用のノートパソコンを合わせても、比較的安価で整備できます。また、専用の教室は不要で、通信ができる範囲内の部屋であれば、どのような教室でも使用することができます。ぜひクリッカーを導入して、本学の授業改善に役立てたいところです。



(写真：名寄市立大学構内 左；正門、右：新館)

名寄市立大学は2006年4月に新設されました。2008年4月現在、保健福祉学部栄養学科、看護学科、社会福祉学科、短期大学部児童学科で構成される日本最北の公立大学です。今後とも、地域に根ざした教育を展開していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

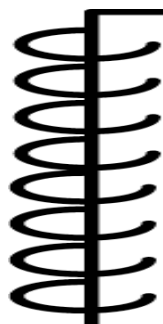
授業改善委員会へのご感想・ご意見をお待ちしています。各学科委員あてにお伝え下さい。

【編集後記】

名寄市立大学は平成18年4月に新設され、本年4月に1年生を迎えると全学年の学生がようやく揃います。本学では教育・研究に力を注ぎながら、地域にできるかぎり貢献する姿勢は変わりません。小さな自治体規模でこのような大学を設置していることを活せるよう、各教員がさまざまな形で地域に貢献していける大学を今後も目指しています。

大学にとって、第一の目的は学生の育成です。そのためにさまざまな授業が用意されています。授業形式もさまざまですので、各教員が苦勞しながら学生に対し、授業を展開していることが本委員会にいるとわかります。来年度からは卒業研究が本格化し、各教員の多忙さはこれまでにないものとなります。授業改善委員会では少しでも学生のみなさんに効果的な授業を展開できるよう、支援していきたいと思っております。本号の授業改善通信でも、さまざまな実践例などを取り上げましたが、これらの成果のひとつひとつを次の授業改善につなげていければと思っています。

(授業改善委員一同)



発行日：平成21年3月31日

編集・発行：名寄市立大学授業改善委員会

委員：石川貴彦（教養教育部）・西村直道（栄養学科）

高岡哲子（看護学科）・小山充道（社会福祉学科）

中島常安（児童学科）

以上 5名